特集　社会学理論の最前線 ―時間―

社会学の基本概念としての時間

――現象学的社会学と社会システム理論からの展開――

多田光宏

「かつてアインシュタインは、今（the Now）をめぐる問題が彼をひどく悩ませると言った。彼はこう説明した。今という経験は人間にとって特別な何か、過去と未来とは本質的に異なる何かを意味しているのに、この重要な違いが物理学内には出てこないし、出てくることは不可能なのだと。彼にとって科学がその経験を捉えられないのは、苦痛だけれども諦めざるをえないことのようだった」（Carnap 1963: 37）

一　問題の所在

社会学のもっとも重要な基本概念が「意味（Sinn; meaning）」だということに、おそらく異論はないだろう。意味概念を社会学に組み込んだ先駆者は、周知のとおりマックス・ヴェーバーであった。彼によれば、社会文化的な対象を解明するには、それを構成する社会的行為について、行為者自身が考えている意味を理解する必要がある。とはいえ、人間行為に関わる意味を重視したのは、ひとりヴェーバーだけだったわけではない。意味は、スチュアート・ヒューズが「一八九〇年代の世代」と呼んだ一群の人びと――そこにはヴェーバーはもちろん、エミール・デュルケム、アンリ・ベルクソン、またおそらくエトムント・フッサールやゲオルク・ジンメルも含まれる――にとって、まさに有意味なものとして現れていた。一八九〇年代から二十世紀初頭にかけて活躍したこれらの人びとは、啓蒙の合理主義を信奉していた一方で、十九世紀的な実証主義には反旗を翻し、人間的事

象を自然科学に還元せずに探究しようとした（Hughes 1958＝一九七〇）。そのため意味（あるいは有意味的なもの）が、彼らにとって、実証主義の図式的な世界把握に抗して人間行為と人間意識の本性を論じるための、重要な手掛かりとなったのだった。

だが、この世代の思想を特徴づける概念はじつはもうひとつある。それは時間の概念である。このことは、ベルクソンが「純粋持続」を、またフッサールが「意識の流れ」を中心に据えて自身の哲学を展開したことに、典型的に示されている。ベルクソンは実証主義の科学的決定論に対する人間的自由、つまり生の意味と躍動のために、時間に本質的な役割を与えた。永遠ではなく時間こそが、新しくたえまない形態の創造をもたらし、生の多様な発展を可能にするのである。またフッサールは、主観的な意味付与作用が内的時間のなかでおこなわれることを示した。意識体験はみずからにとって絶対的な所与の領域であり、その流れのうちで対象の志向的意味は構成される。このように、彼らにとって時間は意味概念と切り離せず、ある面では意味概念よりも根本的であった。

しかしながら、哲学者たちのそうした考えとは対照的に、社会学では、時間の概念はそこまで明白な仕方では有意味とならなかった。なるほど時間性への注目自体は、社会を生成（社会になっていくこと Vergesellschaftung）と捉えて、社会の実体論と還元論を止揚したジンメルや、経験論とアプリオリズムを批判し、時間カテゴリーを相対的な社会制度としたデュルケムらにも見いだせる。ヴェーバーもまた、社会科学の進歩にとっては、認識の可変性と流動性こそが本質的だと考えていた[1]。

にもかかわらず、社会学において時間は、これまでのところ基本概念とは認知されておらず、行為の一変数や、社会変動の外在的なパラメーター程度の扱いしかされてこなかった。あるいは、時間感覚の変化や相違、時間尺度の多様性や歴史性、計測技術の発達や普及の帰結が、文化集団や社会階層、社会史などに関する、興味深いが単発的な経験的研究を促すにすぎなかった。だが、ベルクソンやフッサールが示したように、人間的事象を物理的事象や化学的事象ではなく、まさに人間的事象として探究するうえで、時間概念が意味概念と同程度か、もしかするとそれ以上に根本的ならば、社会学も時間を基本概念とする可能性を考えるべきであった。すなわち、社会学が固有の仕方で意味の問題に接近するうえで、時間は不可欠で内在的な位置を占めるのかどうか、また占めるとすればいかにしてかが、見極められなければならないのである。

社会学の原理的な部分にかかわる以上、こうした課題の探究はおのずと理論的なものになる。実際、社会学史上では、すでに二人の理論家がこの課題と正面から向き合っていた。現象学的社会学のアルフレート・シュッツと社会システム理論のニクラス・ルーマンである。かくして本稿では、彼らが時間概念をどう扱ったかを追いながら、社会学における時間概念の適切な理論的位置づけを探りたいと思う。

二　現在を取り巻くもの

まず本章ではシュッツの議論を確認しておきたい。周知のように彼は、ヴェーバーの理解社会学を、ベルクソンとフッサールの議論を手掛かりに批判的に掘り下げて、主観的意味が行為者の内的時間と不可分であることを示した。シュッツは、モノを観察するような、動作の表面を眺めたにすぎない行為の直接的（顕在的）理解の場合とは異なり、行為の内的動機に遡及する説明的理解には、行為者の過去や未来についての知識が必要だとした（Schütz 1932: 25 ＝［一九八二］一九九六：四〇参照）。なぜならシュッツによれば、意味とは、行為者が自分の体験の流れに反省的な眼差しを向けることで構成されるものだからである（Schütz 1932: 49-50 ＝［一九八二］一九九六：六八―九）。行為の意味もこの点で同様である。内的持続の現在時点から注意を未来に向けて、ある体験の完了状態を目標として先取りすると、意識のなかで行為の単位が境界づけられる。目的に動機づけられて未来完了時制で投企されたこの行為（Handlung）が、現在進行中の行為（Handeln）について行為者自身が考えている意味（主観的意味）である（Schütz 1932: 55-62 ＝［一九八二］一九九六：七四―八四）。たとえば、ドアノブをつかもうとしているのは、当人からすればドアを閉めるためではない。「ドアを修理する」という未来完了状態が、進行中の行為についてその行為者自身の考えている意味にほかならない。また、こうした未来投企とともに、過去の諸体験も反省を通じて意味的に縁取られ、経験の連関（解釈図式）に組み込まれたり、投企の理由として過去完了時制で回想されたりして、行為の意味の主観的構成に寄与する。このように、行為の意味単位が行為者各人の内的時間に依存するなら、タルコット・パーソンズの想定する規範的な共通価値は、行為の意味の究極的な源泉ではありえない。

ところでシュッツは、行為者が意味を「結びつける」、という表現をはっきり否定していた（Schütz 1932: 40 ＝［一九八二］一九九六：五八）。意味とは行為者が反省的な眼

差しを向けるためのメディアであり、眼差しの向けられた体験はすでに意味的に縁取られている。周知のようにフッサールも、「すべての実在的単位は『意味の単位』」（Husserl [1913] 1950: 134 = 一九七九：二三八 強調体原文）だとしていた。つまり、行為者はいわば全身が意味の世界に浸って生きている。意味から逃れることはできない。できるのはただ、無限に広がる複雑な意味の可能性から特定の意味を選択することだけである。実証主義的な世界像さえひとつの意味選択にすぎない。「現実（reality）を構成するのはわれわれの諸経験の意味であって、対象の存在論的構造ではない」（Schutz [1955] 1982: 341 = 一九八五：一七八）。かくして問われるべきは、まさにある特定の意味選択が、行為者のうちでいかにして「今そのように（Jetzt und So）」なされるのか、という点になる。

こうした意味選択の問題を、超越論的水準を持ち出さずに明らかにしたのがシュッツであった。彼は、意識の自己準拠構造とその本質的な時間性を示した。そのことは、彼が自身の試みを「現象学的心理学」（Schütz 1932: 42 = ［一九八二］一九九六：六〇）と呼んだ点に見て取れる。フッサールやベルクソンの陰に隠れがちだが、その「心理学」という部分を真に支えるのは、思考を「流れ」と特徴づけた元祖でもあるウィリアム・ジェイムズのように思われる。[2] 渡米後のシュッツがジェイムズの諸概念を好んで援用したことは知られているが、その理由のひとつは、ジェイムズの意識観にあった。シュッツによればそれは次のようなものであった。すなわち、「進行していく思考それ自体がまさしく思考する者」（Schutz [1941] 1966: 4 = 一九九八：四〇）なのである。[3] ジェイムズにとって個人心理は、孤立した心的原子や、魂のような形而上学的実体、時間超越的な先験的自我などには還元できない（Schutz [1941] 1966: 3 = 一九九八：三九―四〇；James 1892: 215-6 = 一九九二／九三［上］：二九九―三〇一 参照）。意識はつねに当の意識自身に準拠することで、みずからのうちに時間の連続と地平とを構成する。ある新しい思考の単位も、意識の流れの全体に包まれてはじめて成立する。ジェイムズが「暈（*fringe*）」（James 1892: 166 = 一九九二／九三［上］：二三一 強調体原文）と呼んだのは、現在位相の心像を取り巻くそうした意識のことであった。[4] それゆえ彼にとって、連続的意識の全体こそが、個人心理を論じる際の「最小物」（James 1892: 464 = 一九九二／九三［下］：三二三 強調体原文）であり、経験的な対象であった。[5]

客観的には同一とされる事物や事象が主体ごとに別々の意味で現れるのは、それぞれの主体が自分で築き上げてきた固

有時間の違いゆえである。固有時間は、潜在的な可能性も含めた当の主体の選択の積み重ねであり、特定の現実認識の仕方を自明なものへと仕立て上げて、さらなる選択を方向づける。時間性にもとづくこの内的秩序は、いわば自生的秩序（spontaneous order）であり、外的な何かによって形成されたり制御されたりするものではない。パーソンズが例の『往復書簡』（Grathoff ed. 1978＝二〇〇九）でシュッツを理解できなかったのは、パーソンズが、行為者間で共有される非時間的なイデア的対象の分析的実在性を前提したからであった。[6] 彼は社会秩序ないし二重の偶然性の問題を、反時代的とも言うべき価値一神教で「解消」した。結果として彼は、人の個体化ではなく社会化（socialization）を重視することとなった。

公平性のために付け加えておくべきだろうが、現象学的社会学のその後の展開も、この点ではパーソンズとさほど違いはない。戦後の人文・社会科学でもてはやされた言語論的転回に、現象学的社会学の流れを汲む一定の人びとも大いに便乗したが、それというのは、他者の主観的意味の理解という問題を、相互主観的な言語的意味の問題として「解消」するためであった。だが同一言語の共有は、その範囲が広いほど、近代においては生活世界というより国民国家の教育システムと強く結びついている。[7] 仮にこれを度外視しても、同時代における意味の個人化、また現実の多元化を考えるには、各人の固有時間への着目こそが必要であった。

内的時間に関するシュッツの洞察を継承していると言えそうなのは、一般には行為理論と対立的だとされる、ニクラス・ルーマンの社会システム理論である。ルーマンが言語論的転回になびかなかったのは、意味を規定するのが言語ではなく社会システムだと考えたからであった。[8] もとより、言語使用の社会的文脈は無視できず、また長期的には意味論自体が社会の構造変動と相関して変容するのだから、社会学における意味の問題は言語理論には還元できない。さらに言えば、多元化し複雑化していく現代社会にあって、規範的価値であれ言語であれ、何かが共有されているという信念自体がもはや現実的ではない。今日の社会は、むしろ個々のシステムの自律性と閉鎖性にもとづく果てしない細分化によって特徴づけられる。そしてその根本条件として、時間がふたたび登場するのである。

三　意味の世界と時間の秩序

ルーマンが自身のシステム理論に現象学的な意味概念を導

入したことはよく知られている。だが意味とともに、時間に関する現象学的な洞察もまた、人間意識と社会システムとの空間的なサイズの違いを超えて彼の理論の根幹に組み入れられていることは、あまり理解されずにきた。[9] まず、システムが環境に逐一反応せずとも自律的かつ閉鎖的に作動できるのは、その固有時間のおかげである（Luhmann 1997: 83-4 ＝二〇〇九：七九―八〇 参照）。システム要素の意味単位は、独立自存の原子でもなければ、外部の何かによって規定されるものでもない。それは、つねに現在位相を進行していく作動プロセスの前後関係、およびその現在に相関して広がる過去と未来（想起と予期）の地平構造のなかで、システム内的に選択される。ルーマンの言う自己準拠的システムとは、そのようにして時間化した動的安定のシステムにほかならない。自己に準拠するとは、自身の時間性に準拠することである。つまり、固有の時間を組織化することで世界複雑性（意味自体の複雑性）を縮減・限定し、自身の単位要素を継起的に秩序づけて、生成消滅する瞬間的な出来事としてたえまなく自己再生産していくのである。ルーマンにとって、自律性と閉鎖性の基礎に固有時間を置くこうした社会システムこそが、社会学における経験的な最小物だった。

ちなみにルーマンは、時間について、以上のような理論的観点からだけでなく、社会文化的進化の観点からも論じている。彼によれば、時間の概念（意味論）は、古代や中世ではまだ運動などの空間的事象から未分化で、あるいは神の永遠性の下位に置かれていたが、物事の変化が増し、新しさへの評価が芽生えた近代になると、現在を境に非連続的な過去と未来の区別で反省的に特徴づけられて、独自の意味規定の形式となった（Luhmann 1980: 235-300 ＝二〇一一：二一七―七七；Luhmann 1990; Luhmann 1997: 997-1016 ＝二〇〇九：一三一三―三四；高橋 二〇〇二：一四一―七 参照）。そのかぎりで時間は、システムの自己産出作動に伴うたんなる所与ではなく、出来事の意味をより詳細に特定するために分化した、事物次元と社会次元に並ぶ意味次元の一つとされる（Luhmann 1984: 111-22 ＝一九九三／九五：一一五―二六）。言い換えれば、時間とは現実（リアリティ）に対する観察スキームの一種であり、だからこそ特定の社会構造のなかで初めて観察スキームとしての意義を得る。たとえば身分的な階層分化から機能分化への移行は、未来を個人の選択に開かれたものとし、社会の未来志向を導いている（Luhmann [1973] 1975: 115, 122-4 ＝一九八六：一三〇―一、一四八―五一；Luhmann [1976] 1982; Luhmann 1992: 133 ＝二〇〇三：九五；Luhmann 1993: 115-6 ＝二〇〇三：一二二

参照[10])。「歴史はすでに複雑性を縮減し、別の諸可能性を排除しており、もはや現在に対する無条件の優位性をもたない。現在に無条件に優位するのは未来のほうである。過去はいまでは完結していて、終わったものと考えられている。〔中略〕人間が意のままにできる余地が拡大するにつれて、伝統の強制は、選択への強制に取って代わられるのである。サーリンズはこの発展を次のように評している。『われわれは〔かつては〕選ばれた民であったが、いまや選ぶ民である』と」(Luhmann 1971: 57-8 = 一九八七：六一 強調体原文)。ただ本稿では、時間意味論に関する議論にはさしあたり立ち入らず、社会システム理論への現象学的な時間把握の組み込みが、とくにセカンド・オーダーの観察（観察者の観察）と呼ばれる課題にとっていかなる意義を持つかに考察の焦点を絞りたい[11]。

まず、現象学が意識に関して見いだしたように、社会システムの要素的作動であるコミュニケーションは、つねに何かのコミュニケーションであるという志向性を有している（多田 二〇一三）。コミュニケーションと外的現実とのこの不可避の志向的相関によって、社会システム独自の観察能力に基礎が与えられる。社会システムとは、対人間のたんなるマクロ構造（＝モノ）ではなく、世界のなかの自律した一種独特の認識主体なのである。

おそらく明らかなように、社会学におけるシステム理論の問題設定は、ルーマンを経ていわば認識論的な転回を遂げている。彼の理論は、システムの内部構造の何たるかを存在論的に突き止めようとするのではなく、個々のシステムがいかにして、またどのように外部世界（環境）を認識しているかという、システムの「主観性」を「理解」することに向けられている。彼が、全体と部分ではなくシステムと環境の区別に定位し、セカンド・オーダーの観察を掲げるのは、このためであった。その意味で、彼の理論はむしろ主観主義の系譜に連なるものとして、社会学史が書き換えられなければならない。ルーマンの社会システム理論は、言うなれば「社会システムの理解社会学（Soziale Systeme verstehende Soziologie）」（多田 二〇一三：第十章）である。そしてそれが現象学的に基礎づけられるのである。

ここで強調しておくべきは、「主観的」ということが「恣意的（ランダム）」を意味しない点である。行為者の意識がそうであるように、社会システムによる意味選択にも独自の一貫性があり、それが安定的な、だからこそシステムごとに異なる社会的現実と、その多様性をもたらしている。よって問われるべきは、選択の一貫性を可能にする条件である。そ

して現象学的観点からは、時間こそがその答えであった。コミュニケーションの志向性を介してそのつど社会システムに立ち現れてくる現象（意識現象との対比で社会現象と呼べるだろう）の意味単位は、当該システムの過去と未来との関係で重みづけられて選択される。システムが自己再生産とともにみずからで築き上げてきた固有の時間が、諸可能性を秩序づけて、システムごとに現実認識の質を「今そのように」規定するのである。

意味の複雑な世界は、それ自体では無時間であり、ありとあらゆる可能性が等確率で並存するカオスである。神のような全知全能の観察者なら、その全部をいちどに顕在化できよう。すべてが同時に現在（現前）している永遠性の空間である。だが、現世に生きる経験的な観察者は誰もが選択せざるをえない。選択は強制である。そして、ともかくもなされた初期の偶然的な選択が、均一で真っ平らな、だからこそ法外な可能性をはらんでいたはずの意味の世界に、小さな溝を刻み、水路となって、つづく他の選択作用を方向づける。つまり、意味の選択に経路依存性が発生する。結果、溝はますます深く強固になり、流れは地平に向かって長く伸びていく。このようにして、あちこちに流れが（漸進的な変化だけでなくときに突発的な激変も伴いながら）形成され、複文脈的で多元的な、起伏に富んだ社会的現実の風景が現れる。それは本来的には別様でもありえたが、自然的態度の人びとからすれば、問い直されることのない見慣れた自明の風景を構成する。

複雑な意味の世界にみずからを刻みつけていくそうした溝の流れこそが、自己準拠的システムにほかならない。それは当のシステムが不断に自己産出していく時間そのものである。意識に対する「持続」や「流れ」といった比喩が表していたのは、このことであった。時間のなかにシステムがあるのではなく、システムがまずあってそれが時間を持つのでもなく、システムが時間なのである（多田一〇一三：五一五）。それゆえ、自己準拠的システムの認識を観察する観察者（セカンド・オーダーの観察者）は、ベルクソンの言葉を借りるなら、すべてを「持続の相のもとに（*sub specie durationis*）」（Bergson 1934: 162, 199＝一九九八：一九八、二四六）観察しなければならない。社会システムの自己準拠という事態を真剣に掘り下げるなら、その基礎には時間性があると気づくべきであった。カオスの世界のなかに、限定された意味の絡み合いによってシステムが収束するうえで、時間は本質的な役割を果たす。現在における意味単位の出現が、ランダムではなく秩序を構成するのは、そこに過去と未来の地平に広が

る固有時間がつねに伴われているからである。それは、現在において持続的なシステム状態を形成して、同じく現在における瞬間的なシステム出来事のための「量」となっている。つまり、「今そのように」生成する意味単位は、システムの固有時間の関数なのである。[12] そしてそれは消滅してふたたび固有時間の一部となり、さらなる別の意味単位を規定していく。

こうして、偏りのない等確率な諸可能性の対称性と同時性が破れて、自生的な時間秩序の島が浮かび上がる。偏りのなさとはカオスであり、ランダムネスの世界であるのに対して、諸可能性の生起確率の有意な偏りこそが秩序（規則性）であり、システムである（多田二〇一三：二五四―六）。このとき時間は秩序問題に対する回答でもある。システムは自身の時間性に準拠することで、現在時点での特定の意味選択を高確率（wahrscheinlich; probable）にし、自律的に内的秩序を構成していく。まだからこそ時間は、現在位相における意味を理解するうえで、根本的な位置を占めている。意味選択は、固有の時間秩序を量のように伴って現れており、そのなかでのみ、支離滅裂ではないまさに意味のある選択たりえるのである。

四　結びにかえて――時間と自由

自明性を疑うことが社会学の課題だという認識は、今日、社会学者のあいだではほぼ自明視されていて、疑われることがない。だが、そもそもいかにして自明性を疑うことは可能か。これには理論的な反省が必要であり、本稿はある面ではそのためのものであった。自然的態度のファースト・オーダーの観察者に自明視されている現実は、主観性ないし自己準拠性の相関物であり、無限の諸可能性を選択的に縮減したものであって、別様にもありえたはずであった。自明性を疑うというスローガンで社会学的観察者がおこなうのは、ファースト・オーダーの観察者がいかにして現実を「今そのように」意味的に切り取っているのかを、理解することである。そしてそのためには、時間は社会学の基本概念であらねばならないというのが、以上で示したことであった。

シュッツによれば、社会的世界を観察する者の興味を惹くのは、「何が表現されているかの解釈、つまり表現のイデア的対象性や、誰が措定したとしても変わることのないその意義ではない。社会的世界の観察者はむしろ、今ここでそのようにこの措定を遂行したのがまさにA〔という人物〕だとい

う現象を、解釈しようとする」(Schütz 1932: 32 = [一九八二]一九九六：四八 強調体原文)。認識パースペクティヴの個体性、つまり現実認識の一致ではなく相違こそが、近代社会を特徴づけている。そして、認識の違いを構成するのが固有時間なのである。仮に複数の認識者がまったく同時に、同一の空間的な位置と角度から世界を眺めたとしても、認識者ごとに固有時間が異なる以上、現実の意味は各々で異なって現れざるをえない。自己産出される時間こそが、認識者の個体性をかたちづくる。

このとき、シュッツからルーマンへの理論的発展は、意味の問題を社会的水準で考えることを可能にした点にある。シュッツは、ヴェーバーが看過した主観的意味の時間的基礎を指摘したが、どこか十九世紀の実証主義的な、個人行為者への還元主義を引きずっていた。これに対してルーマンの社会システム理論でなら、コミュニケーションの志向性にもとづいてそうした還元主義を回避し、社会的なものを社会的なものとして考えることができる。つまり、意味の主観的構成ではなく社会的構成が、社会システムの固有時間の相のもとで理解されるのである。

実際、意味が社会学の基本概念とされて百年ほどが経過した現在、あらためて社会を時間という観点から観察することには意義があろう。たとえば、グローバル化によって世界社会の空間的統合が進んでいるはずなのに、実感としてはむしろ際限なき細分化が進行しているとすれば、そのパラドクスの背景には、固有時間の分化があると考えられる。あらゆるシステムは現在位相に同時並存するが、自律的で閉鎖的である以上、純然たる同一の過去や未来を共有することはない。そのため、現実の意味はシステムごとで別様に現れる。伝統的な価値や規範、未来の希望や理念も、かえって分裂の原理として機能する。時間超越的な何かがすべてのシステムを一律に方向づけ、統合するのではなく、個々のシステムのほうが固有時間にもとづいてそうした何かを「今そのように」選択するからである。超越的なものは時間の関数にすぎない。

だが見方を変えれば、意識主体（意識システム）にせよ社会システムにせよ、時間はそれらの自由の基礎になっている。システム間での直接的な介入や統制は、固有時間によって原理的に妨げられている（多田 二〇一三：五五四―六）。時間は自律性と閉鎖性を可能にし、現在位相での意味選択の多様性を産出しつづける。むろん他のシステムから規律化や変容を迫られることはあろう。だがそうした場合も、システム同士の圧力や抵抗、あるいは同調や服従などを、それぞれの固有時間のパースペクティヴを通して観察することには、社会

学的な意義がある。たとえ一方が他方の言いなりに見えたとしても、そこには固有の「今そのような」意味が、したがって攪乱や変異、別様性の種が残りつづけるはずだからである。

それゆえ社会システム理論は、何よりもまず時間性に懸けることになる。たとえば、政治システムによる「選択と集中」がもたらしつつある現下の「人文・社会諸科学の危機」にあっても、超越論的現象学のように古代ギリシア以来の永遠の学問的（哲学的）理念を喧伝するのではなく、当該の政治システムを観察し、その未来像を疑って、ガリレイ的自然科学の徹底化の果てに訪れるはるかにリスキーな別様の未来（意図せざる帰結、あるいは盲点）を示すのである。政治システムとの宥和こそ成立せずとも[13]、相手の時間地平に訴えて社会学的啓蒙を試みる可能性が妨げられているわけではない。流れの向きを変えるチャンスはゼロではない。

ただこうした時間化は、翻って、人文・社会科学にも自己反省を迫るだろう。とりわけかつての「実証主義への反逆」には、真っ先に見直しが加えられねばならない。ベルクソンによれば、近代科学とは「時間を独立変数として考えようとする熱望」（Bergson [1907] 1940: 335 = 二〇〇一：三七八 強調体原文）だったが、今日の自然科学の時間観や世界像は、「一八九〇年代の世代」のころとは一変している。たとえば、時間が準拠系から独立した絶対的なものでないことは、アインシュタインの相対性理論によってすでに示されている。また量子力学は、決定論的で永続的な前後関係にもとづく因果律の世界像を、確率的に記述される生成と消滅の世界像に置き換えている。さらに熱力学は、近代において時間意味論の変化として現れた過去と未来の非対称性、つまり不可逆的な時間性を、自然のなかに見いだしている。バーバラ・アダムが指摘するように、「社会科学者が人間領域だけに限定して守り続けているものは、ほとんどが自然全般に当てはまるのである」（Adam 1990: 150 = 一九九七：二四四）。

意味の問題、ひいては時間の問題は人間存在の根幹に関わっており、この点で自分たちは自然科学から特権的に区別される、とする心の習慣が、人文・社会科学者に広く浸透している。だが実際には、自然的時間と人間―社会的時間とを切り分けて、前者に対する十九世紀的な見方を保持しつづけているのは、むしろ人文・社会科学者のほうだろう（Adam 1990: 49-69, 152 = 一九九七：八〇―一一四、二四六―七 参照）。自然科学のそうした定型的なイメージ、またそれと表裏一体の人間中心主義の世界観を、いつまでも自明視するわけにはいかない。自然科学者が直感や常識に反する知見にもみずからを開いて研究の前線を押し上げていったのに対し、

人文・社会科学者は過去の偏見に囚われて、ことあるごとに錦の御旗よろしく永遠の学問的理念を決まり文句にして安心するという、それ自体危機的な「溝」にはまりがちであった。[14] しかしながら、真に時間性に懸けて、学問自身のために未来を投企するならば、自己を啓蒙し、自己からも自由になれなければならないだろう。学問の自由と進歩に向けて、ほかならぬ人文・社会科学の時間構造にも転換が求められると思われる。

[付記] 本稿は、多田（二〇一三）および多田（二〇一六〔予定〕）をもとにして、第五五回日本社会学史学会大会シンポジウム「社会学理論の最前線――時間」（二〇一五年六月二八日、於京都大学）のために作成した報告原稿に、加筆修正をおこなったものである。

註

（1） 以上につき、ヴェーバーとジンメルに関しては、多田（二〇一三）の第十章第四節と第十二章をそれぞれ見よ。なお、時間を社会制度とするデュルケムの指摘は、以下でも少し触れる、社会構造と時間意味論をめぐるルーマンの議論にも通じるが、本稿とのかかわりでより重要なのは、デュルケムがおそらくはウィリアム・ジェイムズの心理学を参照して、社会の創発特性を「思考の流れ」との類比で把握していたことだろう。多田（二〇一三：第一章）を見よ。

（2） シュッツは、ジェイムズの「思考の流れ」と「暈」の概念が、現象学的心理学の本質的な諸領域と通底していると指摘している。たとえば Schutz（[1941] 1966: 134 = 一九九八：五一）および Schutz（[1945] 1982: 115-6 = 一九八三：一九五）を見よ。

（3） ジェイムズ自身の表現によれば、「思考自身が思考する者」（James 1892: 216 = 一九九二／九三［上］：三〇一）である。

（4） ジェイムズの意識観が創発主義的であり、シュッツがこのことを看破していたのは、強調しておく価値があろう。シュッツによれば、ジェイムズとフッサールはともに人の意識の現実存在（existence）を出発点としていた（Schutz [1941] 1966: 2 = 一九九八：三九）。「フッサールと同じくジェイムズにとっても、心的な生は、再統一されねばならない多数の諸要素から成り立っているのではない。心的な生は、並置された諸々の感覚からなるモザイクなのではなく、最初から、たえまなく流れゆ

く思惟からなる統一体である」(Schutz [1941] 1966: 3 = 一九九八：三九)。実証主義（たとえば連合心理学）の想定のように、原子のごとき自存した感覚や思惟があって初めて意識があるのではなく、意識の流れの全体があって初めて個々の感覚や思惟がある。シュッツは明らかにこうした創発主義的な意識観を支持しており、ジェイムズ、フッサール、ベルクソンの時間論に依拠したのもそのためであった。「現在の思惟（present cogitation）は過去把持と未来予持の暈に取り巻かれていて、たったいま起こったことや、すぐあとに起こると予期されることに結びつけられており、そして、もっと遠く離れた過去と未来の思惟をも想起や予想によって指し示しているのである」(Schutz [1945] 1982: 109 = 一九八三：一八七)。

(5) ジェイムズのラディカル経験主義については、James ([1904] 2003 = 二〇〇四) などを見よ。

(6) ただし、パーソンズの分析的実在主義を哲学的に支えたのは、じつはフッサールが示した汎時間的なイデア性の考えであった。多田（二〇一三：第十三章第二節）を見よ。

(7) たとえばトーマス・ルックマンらは、言語を相互主観的な共有物として自明視してしまい、その社会的構築性をほぼ無視しているように思われる。ルックマンの議論における宗教社会学と言語的社会学の相補性を例に、時代背景を踏まえながら言語的社会学の拡大について論じたものとして、Tada (2015) を見よ。

(8) ルーマンは、社会学の意味概念を言語理論で基礎づける試みにはっきり疑念を表明している。たとえば Luhmann (1971: 71 = 一九八七：七五—六) を見よ。

(9) ルーマン自身が時間分析におけるシステム理論と現象学の統合を提唱している。たとえば Luhmann ([1976] 1982: 277-8, 286) を見よ。ただ、そこで焦点が当てられているのは、過去と未来を現象学的に地平として概念化するという点である（これは近代の時間意味論も念頭に置いてのものでもある）。対して本稿では、さしあたり時間性をより広く、創発と認識のための意味システムの基礎として捉えたい。そのかぎりで、「流れ」のような空間運動にもとづく比喩も、理解を促すために用いることにする。強調したいのは、意味システムをたんなる意味連関として捉えるだけでは、システムの創発と「今そのような」選択的認識の基礎が分からないということである。

(10) ただし、近代社会における機能分化と「未来化

(futurization)」(未来地平の開放性の増大)との関係について、ルーマンの言い方には煮え切らなさが残る。上での叙述はいわゆるメリトクラシー化への社会変動を述べていると言ってもよいが、ルーマン自身は未来化を、市民社会(ブルジョア社会 bürgerliche Gesellschaft)における経済の優位との関連で捉えているようであり(Luhmann [1973] 1975: 115 = 一九八六:一三〇—一参照)、これだけを見れば機能分化と未来志向との関係はやや曖昧である。またルーマンによれば、近代の時間意識の特徴は、未来を開かれたものと捉えるようになった点ではなく、過去と未来の区別を時間観察の主導図式とするようになった点にあるという(Luhmann 1991: 45-51 = 二〇一四:五四—六〇)。だが他方で彼が、自律的な機能システムの分化した社会が未来を開き、また、時間意識の変化が階層分化から機能分化への社会の構造転換に相関していると考えているのは間違いない(Luhmann [1973] 1975: 123-4 = 一九八六:一五〇—一; Luhmann 1980: 255-71 = 二〇一一:二三八—五一)。さらに彼によれば、機能分化した近代社会は構造的に未来開放的たらざるをえず、各機能システムへの個人のアクセスのチャンスも属性主義的に決定されているのではなく、人権規範で原理上は平等に保証されることになったとしている(現実には機能システムがそれぞれ個人の包摂を内的に規制し正当化するものとするが)(Luhmann 1993: 115-6 = 二〇〇三:一二二—三参照)。伝統的社会から転換した市場志向の「市民」社会において、未来が、平等の公準化による過去の否定を意味したのはたしかだろう(Luhmann [1976] 1982: 287 参照)。これらを勘案すれば、ルーマンが機能分化社会をまずは未来志向的だと見ていたとするのは、十分な理由があると思われる。

(11)

時間意味論の観点から見れば、「意味の問題は時間の問題」というより、逆に「時間の問題は意味の問題」と言えることは注記しておく。時間は、時代や社会ごとの特定の意味図式による、観察を通じた構築物だということである(Luhmann 1990: 108, 114)。こうした「観察時間」を、システムの自己準拠に不可避にともなう「作動時間」とどう接合するかは、ひとつの課題ではある。作動時間と観察時間の区別については、Nassehi (1993: 193) を見よ。ただ、意味システムの再生産には自己観察が不可欠であり、よってそれらふたつの時間概念をどれくらい厳密に区別すべきかは議論の余地がある。別の言い方をすると、作動時間も観察を通じた意味的産物だ

と考えることは、十分可能だと思われる。

(12) Muzzetto（2006: 17）は、シュッツ理論における意味と時間の関係について類似の定式化を示している。ただ彼は、主観性を唯一無二の時間流として適切に把握する一方で、主体の選択活動を駆動する有意性の内的体系は社会的に構成されるものであり、社会化を通じて継承された文化を付帯しているとする（Muzzetto 2006: 16-17参照）。だがこの種のミクロ－マクロ・リンケージが、パーソンズの規範主義とどう異なるかは定かではない。

(13) もとよりイデオロギーに関係なく成立すべきではなかろうが。関連して、ルーマンの理論とリベラリズムの関係について論じた、小山（二〇一五）も見よ。それによれば、近代社会の機能分化は政治を境界づけて、全体主義（政治の全面化）を阻止する。ただ、全体主義がほかならぬ近代社会で発生したという事実との整合性は問われる。また、実際に全体主義化した社会や場面で、そこに取り込まれないための最小限の自由はいかにして可能かも、あわせて考えられるべきだろう。

(14) ちなみにアダムによれば、「ルーマンには二十世紀の科学思考との調和が見いだせるが、一方で彼の同業者たちは、現実世界の時間（temporal time）を人間と社会の領域だけにとっておき、古典的な十九世紀思考の二元論に閉じ込められたまま」であり、「私の知るかぎりでは、ルーマンが、量子物理学と熱力学理論の重要な洞察のいくつかを受け入れようと努めている唯一の社会理論家である」（Adam 1990: 65, 66 = 一九九七：一〇八、一〇九）。

文献

Adam, Barbara, 1990, *Time and Social Theory*, Oxford: Polity Press.（＝一九九七、伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局.）

Bergson, Henri, [1907] 1940, *L'évolution créatrice*, 52e éd., Paris: Presses Universitaires de France.（＝二〇〇一、松浪信三郎・高橋允昭訳『ベルグソン全集 四 創造的進化』〔新装復刊〕白水社.）

———, 1934, *La pensée et le mouvant: Essais et conférences*, Paris: Félix Alcan.（＝一九九八、河野与一訳『思想と動くもの』岩波書店.）

Carnap, Rudolf, 1963, "Intellectual Autobiography," Paul Arthur Schilpp ed., *The Philosophy of Rudolf Carnap*, Chicago: The Library of Living Philosophers, 1-84.

Grathoff, Richard ed., 1978, *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Bloomington and London: Indiana University Press. (＝1977, Walter M. Sprondel übersetzt. u. hrsg., *Zur Theorie sozialen Handelns: Ein Briefwechsel*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.)（＝二〇〇九、佐藤嘉一訳『社会的行為の理論論争――A・シュッツ＝T・パーソンズ往復書簡〔改訳版〕』木鐸社.）

Hughes, Stuart H., 1958, *Consciousness and Society: The Reconstruction of European Social Thought 1890-1930*, New York: Alfred A. Knopf, Inc.（＝一九七〇、生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会――ヨーロッパ社会思想一八九〇―一九三〇』みすず書房.）

Husserl, Edmund, [1913] 1950, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, Walter Biemel hrsg., Husserliana Bd.III, Den Haag: Martinus Nijhoff 1950.（＝一九七九／八四、渡辺二郎訳『イデーン〔一―一、二〕』みすず書房.）

James, William, 1892, *Psychology: Briefer Course*, London: Macmillan.（＝一九九二／九三、今田寛訳『心理学〔上・下〕』岩波書店.）

――, [1904] 2003, "A World of Pure Experience," Ralph Barton Perry ed., *Essays in Radical Empiricism*, New York: Dover [1912] 2003, 21-47.（＝二〇〇四、伊藤邦武訳「純粋経験の世界」『純粋経験の哲学』岩波書店、四六―六〇.）

小山裕、二〇一五、『市民的自由主義の復権――シュミットからルーマンへ』勁草書房.

Nassehi, Armin, 1993, *Die Zeit der Gesellschaft*, Opladen: Westdeutscher Verlag.

Luhmann, Niklas, 1971, "Sinn als Grundbegriff der Soziologie," Jürgen Habermas und Niklas Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?* Frankfurt a.M.: Suhrkamp, 25-100.（＝一九八七、佐藤嘉一訳「社会学の基礎概念としての意味」佐藤嘉一・山口節郎・藤沢賢一郎訳『ハーバーマス＝ルーマン論争批判理論と社会システム理論』木鐸社、二九―三四.）

――, [1973] 1975, "Weltzeit und Systemgeschichte: Über Beziehungen zwischen Zeithorizonten und sozialen Strukturen gesellschaftlicher Systeme," *Soziologische Aufklärung Bd.2: Aufsätze zur Theorie der Gesellschaft*,

Opladen: Westdeutscher Verlag 1975, 103-33.（＝一九八六、土方昭訳「世界時間とシステム史」土方昭監訳『ニクラス・ルーマン論文集三 社会システムと時間論』〔抄訳〕新泉社、一〇三―一七〇.）

———, [1976] 1982, "The Future Cannot Begin: Temporal Structures in Modern Society," *The Differentiation of Society*, translated by Stephen Holmes and Charles Larmore, New York: Columbia University Press 1982, 271-88.

———, 1980, *Gesellschaftsstruktur und Semantik: Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft*, Bd.1, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.（＝二〇一一、徳安彰訳『社会構造とゼマンティク 一』法政大学出版局.）

———, 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.（＝一九九三／九五、佐藤勉監訳『社会システム理論〔上・下〕』恒星社厚生閣.）

———, 1990, "Gleichzeitigkeit und Synchronisation," *Soziologische Aufklärung Bd.5: Konstruktivistische Perspektiven*, Opladen: Westdeutscher Verlag, 95-130.

———, 1991, *Soziologie des Risikos*, Berlin: Walter de Gruyter.（＝二〇一四、小松丈晃訳『リスクの社会学』新泉社.）

———, 1992, *Beobachtungen der Moderne*, Opladen: Westdeutscher Verlag.（＝二〇〇三、馬場靖雄訳『近代の観察』法政大学出版局.）

———, 1993, *Das Recht der Gesellschaft*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp.（＝二〇〇三、馬場靖雄・上村隆広・江口厚仁訳『社会の法〔一・二〕』法政大学出版局.）

———, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.（＝二〇〇九、馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会〔一・二〕』法政大学出版局.）

Muzzetto, Luigi, 2006, "Time and Meaning in Alfred Schütz," *Time & Society*, 15 (1): 5-31.

Schütz (Schutz), Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien: Springer Verlag.（＝一九八二〔一九九六〕、佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成――ヴェーバー社会学の現象学的分析』木鐸社.）

———, [1941] 1966, "William James's Concept of the Stream of Thought Phenomenologically Interpreted," Ilse Schutz ed. with an introduction by Aron Gurwitsch, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, The Hague: Martinus Nijhoff 1966, 1-14.（＝一九九八、渡部光・那須壽・

西原和久訳「ウィリアム・ジェームズにおける思惟の流れの概念――その現象学的解釈」『アルフレッド・シュッツ著作集 四 現象学的哲学の研究』マルジュ社、三七―五四.）

――, [1945] 1982, "Some Leading Concepts of Phenomenology," Maurice Natanson ed. and intro. with a preface by H. L. van Breda, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, 5th ed., The Hague: Martinus Nijhoff [1962] 1982, 99-117.（＝一九八三、渡部光・那須壽・西原和久訳「現象学のいくつかの主要概念」『アルフレッド・シュッツ著作集 一 社会的現実の問題［一］』マルジュ社、一七五―九八.）

――, [1955] 1982, "Symbol, Reality and Society," Maurice Natanson ed. and intro. with a preface by H. L. van Breda, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, 5th ed., The Hague: Martinus Nijhoff [1962] 1982, 287-356.（＝一九八五、渡部光・那須壽・西原和久訳「シンボル・現実・社会」『アルフレッド・シュッツ著作集 二 社会的現実の問題［二］』マルジュ社、一一三―二〇四.）

多田光宏、二〇一三、『社会的世界の時間構成――社会学的現象学としての社会システム理論』ハーベスト社.

Tada, Mitsuhiro, 2015, "From Religion to Language: The Time of National Society and the Notion of the 'Shared' in Sociological Theory," *The Annuals of Sociology (Shakaigaku Nenshi)*, 56: 123-154.

多田光宏、二〇一六（予定）、「意味と時間」『社会学理論応用事典』丸善出版.

高橋徹、二〇〇二、『意味の歴史社会学――ルーマンの近代ゼマンティク論』世界思想社.

（ただ　みつひろ・熊本大学文学部准教授）

日本社会学史学会

東京都世田谷区桜上水3-25-40
日本大学文理学部社会学研究室内
電話　03-5317-8978　FAX　03-5317-9423
振替　00180-6-85671

社会学史研究　第38号

2016年6月25日　第1刷

編　集　日本社会学史学会
編集責任者　太田健児・田中紀行
発行者　星　田　宏　司
発行所　株式会社　いなほ書房
〒169-0075　東京都新宿区高田馬場1-16-11
電　話　03（3209）7692
発売元　株式会社　星　雲　社
〒112-0012　東京都文京区大塚3-21-10
電　話　03（3947）1021

乱丁・落丁はお取り替えします。
ISBN978-4-434-22187-3

Studies on the History of Sociology

The Japan Association for the Study on the History of Sociology

Vol. 38

2016

Special Feature:
Frontiers of Sociological Theory : Time in Sociology

Preface .....Takeshi Deguchi

Time as Sociology's Basic Concept:
A Perspective from Alfred Schutz's Phenomenological Sociology and Niklas Luhmann's Social Systems Theory
.....Mitsuhiro Tada

The Theory of Social Acceleration as a Critical Theory:
The Scope of Rosa's Theory
.....Kenichi Ito

Plurality of Times and Ambivalence:
Touraine/Tabboni's Action Theory of Time
..... Eiji Hamanishi

Addiction to"Time"and Modernity:
Dissolution of Time and Sociological Theories
.....Takeshi Mikami

Articles

The Concept of Group and Social Recognition in the Case of Teizo Toda's Research:
Reevaluating of the Historical Standing Point of Teizo Toda as a Sociologist
..... Yukichi Honji

9784434221873

ISBN978-4-434-22187-3
C3336 ￥2000E

1923336020001

発行・いなほ書房　発売・星雲社
定価（本体 2000 円＋税）

ISSN 0288-6405

日本社会学史学会

社会学史研究

第38号

特集・社会学理論の最前線　―時間―

はじめに……出口　剛司（3）

社会学の基本概念としての時間……多田　光宏（7）
――現象学的社会学と社会システム理論からの展開――

批判理論としての社会的加速化論……伊藤　賢一（25）
――ローザ理論の射程――

複数の時間とアンビバレンス……濱西　栄司（41）
――タッボーニ／トゥレーヌによる行為論的時間論――

「時間」に嗜癖する近代……三上　剛史（61）
――時間の溶解と社会学理論――

戸田貞三における集団概念と社会認識……品治　佑吉（79）
――戸田社会学の歴史的再定位にむけて――

2016
いなほ書房